

制度的場面における会話の終結に関する一考察 : 実習反省会の観察から

著者	居關 友里子
雑誌名	国立国語研究所論集
号	13
ページ	51-64
発行年	2017-07
URL	http://doi.org/10.15084/00001371

制度的場面における会話の終結に関する一考察

——実習反省会の観察から——

居關友里子

国立国語研究所 研究系 音声言語研究領域 プロジェクト研究員

要旨

本研究では制度的場面における会話の終結について明らかにするために、実習反省会の場面について観察を行った。先行研究の指摘する日常会話の終結の手続きを手がかりに観察したところ、会話を終結させるか否かの交渉部分に特徴的なやり取りが見られた。ここには言い残しがあるか否かを言語表現で明示的に確認するもの、およびこの交渉の機会が全く示されないものの二つの型が観察された。後者のような終結が可能であることから、終結の直前ではなくそれ以前の部分において、終結に向けた組織がなされていることが予想され、これを担う資源として、以下の二つを取り上げた。一つは期待される反省会の内容と扱われる順序に関する情報「実習反省会の構造」、もう一つは「何かいい忘れた人はいませんか」といった発話や、談話標識、沈黙、当該発話が扱っている話題を示す表現などといった、現在の発話がどのような局面におけるものなのかを示す発話中の資源「構造化の手がかり」である。参加者はこの二つを対応付けることによって現在の発話の位置を知ることが可能になり、そのため反省会が進行していること、つまり会話終結に向かっていることを反省会の進行中も要所で確認することができることが示唆された*。

キーワード：制度的場面、会話終結、会話構造、構造化の手がかり

1. はじめに

私たちは日常生活の中でしばしば会話をを行い、そのたびに会話の終了を体験している。それまで話していた友人と別れること、あるいは電話を切ることなどはその例の一つである。しばしば体験されるこれらの出来事一つ一つを特段意識することは少ないが、実は会話終結の際に行われていることは単純ではない。会話相手に背を向けて立ち去る、あるいは受話器を置くといったことが、時には「機嫌を損ねた」「問題が生じた」と理解され得ることから分かるように、そこで生じたのが会話の終結であると理解されるには、何らかの適切なやり方がある。私たちが普段から用いているこれらの方法とはどのようなものだろうか。本研究は日常生活の中で体験される会話¹の一つとして制度的場面におけるやり取りに注目し、その終結について記述することを目的とする。

* 本研究は、2016年7月12日に国立国語研究所で開催された第145回NINJALサロンでの口頭発表の内容を加筆・修正したものである。有益なコメントをくださった方々に心よりお礼申し上げる。

¹ 本研究では「会話」について、日常会話 (ordinary conversation) と相互行為における言語活動 (talk in interaction) の両者を含むものとして扱う。

2. 研究の背景

2.1 会話の終結という部分

会話の終結という部分は、これまで継続してきた相互行為を断ち切る部分である。また会話終結の典型例である別れの場面について、参与者同士の関係の間に生じるマイナスの影響を「つくりよう」必要がある（田中 1982）といった指摘があるように、会話終結は相互行為それ自体だけでなく、そこに参与する人たちの人間関係の維持に生じる不安定さをやりくりする部分でもあるといえる。

このような重要な部分で何がどのように行われているのかに関して、電話会話を扱った分析を中心に知見が蓄積されてきた。電話回線を切る直前になされる行為（Albert & Kessler 1978 ほか）や発話の連なりに見られるかたより（Schegloff & Sacks 1973, Clark & French 1981, Button 1987 ほか）、用いられる言語形式（岡本 1991, 小野寺 1992 ほか）などが指摘されている。対面で生じた会話については、診療場面（Heath 1986, Robinson 2001）や、ロールプレーを扱った研究（馬場ほか 2000, 小熊ほか 2004）などがあり、身体的振る舞いを含めた観察がなされている。

日本語で行われ、現実の文脈に生じた会話終結としては、電話会話が分析対象の大部分を占める。これらの電話会話では狭義の日常会話（いわゆるおしゃべり）が行われているものが多く、一方で制度的文脈に生じた会話（授業、法廷、診療などの場面における会話）については、終結という観点からはほとんど扱われてきていない。制度的場面は、当該制度を想起させる目的、役割、アイデンティティに対する参与者の志向があり、そこで行われる仕事の遂行のために参与者がどう携わるかについて特定の制約が加えられ、また推論の枠組みや当該制度の文脈に特徴的な手続きを想起させるとされる（Drew & Heritage 1992）。その一方で制度的場面と日常会話場面は連続的なものであるともされる（Heritage 2005, Heritage & Clayman 2010 ほか）。では、会話の終結についてはどうだろうか。

2.2 本研究の位置付け

日常会話の終結と制度的会話の終結とを、同じ会話の終結という括りのなかで議論することが適切かどうかについては検討する必要がある。しかし少なくとも「発話を伴った相互行為の終わりを形づくる」という点において、両者は共通の課題に取り組んでいると考えることが可能である。そこで本研究は、制度的場面における会話の終結はどのように行われているのかについて、教壇実習に対する反省会におけるやり取りを観察し考察を行う。以下ではまず分析対象とする場面の概要について説明し（3節）、この終結の行われ方に関して観察された二つの型を順に見ていく（4節）。そして、このような終結のなされ方が、実習反省会に観察されるどのような資源によって可能となっているのかについて指摘し（5節）、最後に考察をまとめる（6節）。

3. 分析対象：実習反省会場面

本研究が分析対象とする教壇実習に対する反省会（以下「実習反省会」もしくは「反省会」）の概要と観察する箇所について述べる。

3.1 場面の概要

この反省会は、大学機関に所属する学部生、大学院生（以下「実習生」）を対象とした実習科目の一部として行われたものである。この科目では、実習生が大学近隣に住む日本語非母語話者に募集をかけ、自分たちが作成した指導案をもとに日本語の授業を行う。反省会は実習日毎に行われる。各実習日は一日に三コマの授業が行われ、その後授業の反省・感想や改善案などについて共有し合う。

実習反省会の参加者は、当日授業を担当した実習生（以下「授業担当者」）3名（一コマを1名が担当×一日三コマ）と、その授業を別室で観察していた実習生（以下「授業観察者」）4から8名、そして同様に授業を観察していた担当教員1名である。担当教員は反省会の進行を取り仕切る。この場面におけるやり取りをICレコーダーを用い録音し、書き起こした資料を以下では使用する。収録したデータの内訳は表1に示すとおりである。

表1 データ内訳

資料番号	収録日	収録時間	参加人数	担当教員
X1	2011年5月16日	1時間10分	9名	A1
X2	2011年5月17日	1時間18分	9名	A2
X3	2011年5月18日	1時間10分	10名	A3
X4	2011年5月19日	1時間32分	12名	A4
X5	2011年5月25日	1時間16分	11名	A3
X6	2011年5月26日	1時間26分	8名	A4
X7	2011年5月30日	1時間23分	10名	A1

3.2 観察の焦点

各回の反省会の進行方法は各担当教員に任されているが、どの回も大きくは同じ流れでの進行がなされている。およその流れは以下のとおりである。部屋に集まってきた参加者たちは向かい合う形に並べられた机に着席し、教員の「じゃあはじめましょうか」などの開始の宣言やそれに相当する発話によって反省会が開始する。そして当日行われた三コマの授業が一コマ目から順に取り上げられ、各授業に対してA) 授業担当者の反省、B) 授業観察者のコメント、C) 担当教員のコメントが行われる。Aがはじめに行われるのはどの回も共通する一方で、Bは座席の順に観察者全員が話す形式の場合と、コメントのある人が挙手する形式の場合、あるいはこの両者を併用する場合とが見られる。またBの途中では、授業担当者がコメントを返したり、教員が関連するコメントや授業観察者のコメントを要約したりといった発話を挟む場合がある。またBやCの際には、授業担当者への質問（授業中の特定の部分で、そのような指導方法を採用した理由など）も適宜挟まれる。このAからCを一セットとし、一コマ目の授業、二コマ目の授業、三コマ目の授業の順に、当日行われた三コマが扱われる。一部の回では三コマ目の授業に対する教員のコメントの後、教員が続けてまとめのコメントを行い、その後反省会は終結する。次節で見ていくのはこの最後の部分である。反省会の流れを模式化したものを次に示す（図1）。

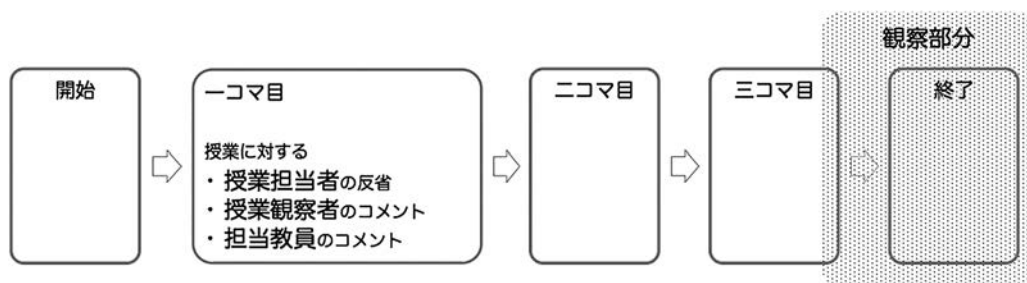


図1 実習反省会の流れ

4. 観察

反省会の観察に入る前に、手がかりとして、日常会話の終結に関する先行研究の指摘を援用したい。Schegloff & Sacks (1973) は、会話の適切な終結のために手続きがなされる部分を「終結部 (closing section)」とし、これを構成する二つの要素を挙げている。

一つ目の手続きは「前終結 (pre-closing)」である。これは会話相手が会話を終結させることに賛成か反対かを確認する手続きであり、話題の終局で行われる。言い残したことがある場合、次の位置でその話題を導入し、ない場合、つまり終結させることに賛成の場合は発話権をパスすることで手続きが完了する。

【作例 1】

- 01 A: そんなかんじでいい？
 02 B: オッケ.:
 03 A: → ジャ
 04 B: あ(.)あとさ手ぶらでいいんだよね？
 05 A: 手ぶら手ぶら
 06 B: わかった.
 07 A: うん.
 08 B: → ジャ
 09 A: は.: い
 10 B: またね.:
 11 A: バイバ.: イ.

作例 1 について、02 行目まででは何らかの取り決めに同意が得られている。このような話題の終局といえる位置でなされた「じゃ」という発話 (03 行目) は、言い残しがあれば次の位置でその話題を導入することを可能にしている。作例 1 の場合は 04 行目でその言い残しが導入されており、前終結の手続きは完了していない。そしてこれに関する同意が得られた 07 行目の次の位置 (08 行目) で、再び前終結の発話がなされる。こちらは発話権のパス、すなわち会話終結への同意が示され (09 行目)、前終結の手続きが完了する。

終結部を構成するもう一つの手続きは「最終交換 (terminal exchange)」であり、順番交替シス

テム (Sacks et al. 1974) を停止する役割を担う。挨拶に挨拶を返すといったような、行為の対となる二つの発話によってなされ、この手続きの結果、続いて生じる「誰も話さない状況」が、会話の終結として理解される。作例 1 でいえば、10 行目、11 行目の挨拶のやり取りがこれに相当すると考えられる。

この二段階の手続きを参考に、反省会の終結のなされ方について観察されたやり取りを二つに分けて見ていく。4.1 節では上に挙げた手続きに類似した形でなされる終結を、4.2 節ではこれとは一部異なるやり方が観察される終結を取り上げる。

4.1 終結の組み立て①：日常会話に類似の組み立て

まずは抜粋 1 を見てみたい(書き起こしに用いた記号については、凡例を論文末尾に記載する)。

【抜粋 1_ 反省会 (X5)】

- 01 A3: うん.> もうちょっと<.hh もっとこう :.hh うん. 詳しく書いて (0.6) あ:(.) 練習
02 できるようなキューのね? シートなんかも分かりやすいの作っ↑て(.) こうやら
03 せたら(.) よかったんじゃないかな°と思います°.sh はいっじゃあ> すいません
04 長くなって以上です.<
05 (0.6)
06 A3:→ あと(.) なんか(.) 言い忘れた: 人とかいいませんか? 大丈夫ですか?
07 (0.4)
08 A3: じゃあ書いておわ-お渡ししてください.:い. じゃあ終わります.:す.
09 A3: お疲れさまでした.:..
10 複: ありがとうございます.:..

ここで行われていることを大掴みにすると以下のとおりである。まず最後の授業に対する教員 (A3²) のコメントがあり (01-04 行目), 「はいっじゃあ> すいません長くなって以上です.<」という発話によってコメントの終わりが示される。間合いを置いた後、言い忘れの確認 (06 行目) と「じゃあ終わります」という終結の宣言がなされ³, 挨拶として聞かれる対となる発話によってこの回のやり取りは終結する。

ここに見られる終結直前の組み立て方は、日常会話の終結に関する指摘に類似している点が観察される。01 行目から 04 行目では、担当教員 A3 が三コマ目の授業に対するコメントを述べ、コメントの終了が言語的に明示される (「以上です」)。ここで一つの発話機会のまとまりの区切れ目がつくられている。そして続く 06 行目の A3 の発話「あと(.) なんか(.) 言い忘れた: 人とかいいませんか?」は、言い残したことのある参加者が、ここで話題を導入することができるということを示す発話である。

² A から始まる話者名は教員を指し、表 1 の「担当教員」と対応する。それ以外の話者名は実習生を指す。なお「複」は複数名によって概ね同時になされた発話に付与している。

³ 08 行目「じゃあ書いておわ-お渡ししてください.:い.」は、授業の評価シートの受け渡しのことを指している。

日常会話の終結における手続きの一つとされる前終結は、話題の終局で、相手に対し話題導入の機会を与える働きを担い、終結に進むか否かの交渉を行うものであった。今見ている 06 行目の発話は、先行するやり取りの終局に置かれているという位置の特徴、また話題のある人にそれを導入できる機会を提示するという機能の特徴について、前終結と類似していることが指摘できる。

ただし日常会話と全く同じではなく、異なる点としてまずは発話デザインの特徴が挙げられる。英語によるミーティング会話を扱った Boden (1994) は、前終結の連鎖が極めて明示的に行われることを指摘しており、挙げられている表現「Okay. Anybody else?」, 「Do we have any other business?」も、今見ている 06 行目の発話に類似している。話題の導入機会を与えているこの発話は、質問の形式が用いられ、隣接ペア⁴の第一成分として組み立てられている。それによって、第二成分の産出が適切となる次の順番がその機会であることが明示される。また「言い忘れた人とか」という表現を合わせて用いることで、この機会を得ることができるのは言い忘れのある人は誰でも、つまりこの場にいる参加者全員にその資格があることを言語化するものとなっている。なお同様の位置でなされた、類似の働きをする発話の例としては次のようなものが観察された。

【抜粋 2_ 反省会 (X2)】

- 01 A2: > なんか < また終わったらまた今度逆からとるとか。
 02 B: うん。
 03 A2: こっち終わったら?° (っていうふうに)°。
 04 (4.0)
 05 A2:→ 私の方からは以上です。他に (.) 何かありますかね。:

【抜粋 3_ 反省会 (X3)】

- 01 A3: .hh ↓は: い. あっじゃあ ↓もう: ↓ 7時も: 過ぎて (.) しまいましたので私が話し
 02 ぎたのかもしれない°けど°
 03 複: ((笑い))
 04 A3:→ 他になんか (.) まだ: 言い忘れ > 私みたいに < 言い忘れた [人とかいませんか?]
 05 複: (((笑い)))
 06 A3:→ 大丈夫ですか?:? もう書きますか?(0.4) あとは.

こういった前終結相当のやり取りに次いで、抜粋 1 の反省会では、挨拶の往復(09 行目, 10 行目)が交され、終結に至る。以上では前終結、最終交換に相当し得る二段階の手続きが観察される例を取り上げた。

⁴ 隣接ペアとは「質問-応答」「挨拶-挨拶」「勧誘-受け入れ/拒否」などのような、会話で用いられる発話同士の結びつきの基本的な単位である。1) 第一成分と第二成分という二つの部分からなる、2) この二つは隣接した位置に生じる、3) 第一成分と第二成分はそれぞれ別の話者によって産出される、4) 第一成分が先に、第二成分が後に産出されるという順序がある、5) 第一成分は対応する第二成分を要求する、という五つの特徴を持つとされる (Schegloff & Sacks 1973)。

4.2 終結の組み立て②：日常会話と異なる組み立て

4.1 節で見たような、終結の際に二段階の手続きが観察される、日常会話の終結に類似の組み立てを示すやり取りがある一方で、このような形での手続きが観察されないものもあった。抜粋4はその例である。

【抜粋4_反省会(X1)】

- 01 A1: .hh まあ徐々に:ねあの集中(.)のっ日本語コースの中で教えるべき(.)項目って
02 いうのはなんだろうかっていうそのコースデザインに関することっていうのも、
03 みんなで考えていってほしいなっというのが希望として一つありますね。
04 (2.6)
05 A1: °はい° 以上です。
06 (11.0) ((タイピング音))
07 A1:→ ということでえ :: ねっ(.)次回に向けての課題ということで(.)ねっ各自ね(.)あの ::
08 > 今日みたいな<ティーチャートークに気をつけようと思った.とかねこれを
09 こうやろうと思ったというこう明確なね(.)目標みたいなのは各教師あったと思
10 うんですけども,今回に出た(.)え:反省というのを生かしつつ(.)次回はあれ
11 がんばるとか(0.4)そういう気持ちで.え::アクションリサーチ的に臨んでいって
12 もらいたいなと思っています。
13 (1.6)
14 A1:→ お疲れさまでした ::
15 複: [お疲れさまでした ::
16 複: [ありがとうございました ::

まず抜粋4で行われていることの概要を見ておく。03行目まででは三コマ目の授業に対する教員のコメントがなされ、沈黙を挟んだ後に「°はい°以上です。」という発話(05行目)でコメントの終了が示される。ここまでの流れは前節で見た事例と共通している。異なるのはこれ以降の終結に向けた組み立てである。A1の発話の間に置かれた間合いとして聞かれる長い沈黙(06行目)の後、発話が再開される(07-12行目)。そして発話の後に再び沈黙を置いた後、最終交換相当の発話によってこの回は終結する。

この間には、言い残したことのある人が発言することのできる機会を明示的に示す形での、前終結に相当する発話がなされていない。例えば12行目の直後などは、話題の終局であり抜粋1のように他に何かコメントはないかどうか、話題導入の機会を示し得る場所である。しかしここではそのような機会が明示されず、手続きは最終交換に進んでいる(14行目と15行目、16行目)。これが前節までで見てきた終結と異なる点である。言い換えると、この終結直前の時点において、A1は終結のタイミングを他の参加者と交渉することをしていない。しかし挨拶と挨拶の最終交換は同様の形でなされており、その後の参加者の振る舞いからもここが参加者たちにとって反省会の終結として問題なく理解されている様子が観察される。そのため反省会の終結は、日常会話

の終結に含まれるような二段階での手続きをとらずとも達成され得るものであることが示唆される。

5. 考察：実習反省会における制度

4節では二段階の手続きを踏む反省会の終結（4.1節）、およびこの二段階が観察されない終結（4.2節）の二通りの型について取り上げた。後者では、言い残しがあるかどうか、今会話を終結させることを了承するか否かに関する交渉を担う前終結に相当する手続きが観察されないという特徴があった。このようなやり方が可能であることは、終結の直前で終結に対する合意を確認し合わずとも良いこと、つまり二つ目の手続きである最終交換以前に、そこで終結が適切であることが参与者間で共有されていることが示唆される。これはどのようにして可能になっているのだろうか。これを可能とする制度的場面に特有の特徴として、本研究では実習反省会のやり取りに観察された二つの資源「実習反省会の構造」および「構造化の手がかり」に注目する。

5.1 実習反省会の構造

まず注目するのは、当該場面で何がどのような順序で行われるのかという会話の構造である。医療場面における医者と患者の振る舞いについて分析を加えた Robinson & Stivers (2001) は、ある活動の段階、例えば問診を終えた時、患者は続いて行われる活動の段階、例えば触診への移行を医者の明確な指示を受けなくとも適切に行っている例を複数示している。ここでの患者たちは、活動の各段階がどのような順序で行われるかという構造に志向し振る舞うことによって、その移行を達成しているとされる。

では実習反省会の構造およびそれに対する参与者の志向はどのようなものだろうか。実習反省会は実習科目の一環として行われる、明確な目的を持った活動である。最も明示的に目的とされているのは、その日行われた教壇実習について意見を共有し合い、今後の日本語教育に関する活動（一番に想定されるのは、自身が日本語教師として実際に教えること）に活かすことのできる知見を実習生が得ることである。この目的は明確である一方で、有益な知見を得ることが達成されたのかどうかを客観的に判断することは困難である。しかしどこかの段階で反省会は終わらせなくてはならない。

このような状況で終結が適切となる時点の一つとして、各参与者が提示すべきであると判断した意見が全て共有された時が挙げられる。3節で挙げたように、反省会では授業担当者、授業観察者、そして担当教員が順に発言する、これが三コマの授業に対し繰り返される。このように参与者に発言の機会を配分しコメントを行うという反省会の進行方法は、意見が一通り共有されたことを見えやすくする方法の一つであるといえる。そしてこの構造は、実習反省会で何がどのような順序で行われるのかについて参与者に一定の情報を与えるものとしても機能し得るものであり、それには最後に行われるべき活動が何かについての情報も含まれる。そのため参与者は、反省会の構造をもとに、反省会を終える最も適切な時がいつなのかを参照することができるという。

実習反省会の構造が参与者に志向されていることは、各回の反省会が結果としてこの展開を見せたことだけでなく、会の進行中における参与者の振る舞いからも見ることができる。

【抜粋 5_ 反省会 (X3)】

- 01 A3: はい .
 02 (0.6)
 03 A3:→ あ h(.) あと (.)> ちよっとごめん <(.) ↓もどってい :い?
 04 複: ((笑い))
 05 A3:→ す:(h) いません ↑もう終わったと思ってた . .hhh ↑ごめんね .
 06 ((中略 2分 26秒 一コマ目の授業担当者 C と A3 のコメントやり取り))
 07 A3: まあもちろんまあ :: ↑ね(.) こう :: いくつとか(.) 言う練習にはなっと思えますけど,(.)
 08 >°そうですね .° <そのへん (.)m: もうちょっと工夫(.) できたら良かったかな? って
 09 すみませんね .:[なんか終 (h) わっ (h) た後に急: に思い出した _
 10 C: [あ: いえいえいえ .

抜粋 5 に観察されるのは反省会の流れに反する行為である。抜粋の冒頭は、担当教員 A3 が三コマ目の授業に対するコメントを終えた部分である。「はい」という発話 (01 行目) と沈黙 (02 目) によって A3 のコメントの終わりが示された後、03 行目以降の振る舞いに注目したい。この A3 の発話「あ h(.) あと (.)> ちよっとごめん <(.) ↓もどってい :い?」の後に行われていることは、一コマ目の授業に対するコメントであった (そのため 06 行目で示した中略の部分では、主に A3 と C によるやり取りが観察される)。つまり 03 行目の「もど」とは、三コマ目へのコメントの後に、一コマ目へのコメントを行うことを指している。反省会の構造にある一コマ目から二コマ目、そして三コマ目の順にコメントするという流れに反していることを A3 は「もど」と言及し、謝罪 (03 行目、05 行目、09 行目) や弁明 (09 行目「急: に思い出した _」) をしている。ここでは、A3 が自らの振る舞いを反省会の流れに逆行するものであると捉え、それが謝罪、弁明すべき違反であると理解したことが示されている。つまり無標とされる正常な進行とは、三つの授業へのコメントは一コマ目から三コマ目の順に扱われ、そして各コマに対するコメントは扱う対象が次のコマへ移るまでの間に行うべきである、そのような反省会の構造への志向がここでのやり取りに示されているといえる。

5.2 構造化の手がかり

続いて取り上げるのは、時間的にひと続きに行われているやり取りの中にある区切れやまとまり、その性質を可視化する相互行為資源である。4.1 節で取り上げた、日常会話と類似の特徴を持つ終結のやり方で用いられていた「あと (.) なんか (.) 言い忘れた : 人とかいませんか?」などの発話について、この発話が日常会話の前終結のように、終結のタイミングの交渉を担うものであるということは既に指摘した。加えてこのような発話は、反省会を構造化するという側面を有していることに本節では注目する。

ミーティングでの相互行為を取り上げた平本・高梨(2012)は、「何か質問はありますか」という発話が、説明を行うミーティング場面の局面を構造化する働きを担っていることを指摘している。話題の境界の後にこの質問がなされた時、あるひとまとまりの説明に関わる話が終了したことが、説明の受け手に示されるとされる。「何か言い忘れた人はいませんか」も、この発話に類似する側面を持っているといえる。この発話がなされた時、ここまでのやり取りは言い忘れがなければ終わることができる局面に至っていることが相手に示され、また言い忘れがあれば、これまでのやり取りとは独立にそれを新規に提示することができる局面に至っていることが相手に示される。つまり前終結相当としたこの発話は、反省会を構造化するものでもあるといえる。このような要素を以下では「構造化の手がかり」と呼びたい。ミーティング会話について Linde (1991) が挙げている、話し合うべき事柄項目間の移行で用いられる話題の終了を示す談話標識(「Well」, 「OK」, 「So」など)や、評価の発話(「Well that's OK.」など)も、ミーティング会話の構造化の手がかりの一つといえるだろう。このような発話を用いることで参与者たちは、遡及的に、また予測的に、自分たちが現在、当該ミーティングの中でどこにいるのかを知ることができる(Atkinson et al. 1978)。つまり反省会が終結しその全貌が示された後、行われたやり取りを振り返る中でようやく当該部分の会話全体における局面が理解可能になるのではなく、参与者たちは相互行為の進行しているその時に、現在までのやり取り、この後に生じるやり取り、そして現在進行中のやり取りが、反省会の進行の中のどこに位置付けられるものなのかについて把握することができるのである。

5.3 実習反省会の構造と構造化の手がかりの対応付け

構造化の手がかりから得た現在の局面についての情報を、実習反省会の構造の中に対応付けることによって、参与者が現在の会の進行について情報を得ている可能性について以上で指摘した。ではここで前終結相当の発話を伴わない終結の組み立て(抜粋4, 再掲)に戻りたい。

【抜粋 4_ 反省会 (X1)】 再掲

- 01 A1: .hh まあ徐々に:ねあの集中(.)のっ日本語コースの中で教えるべき(.)項目って
 02 いうのはなんだろうかっていうそのコースデザインに関することっていうのも、
 03 みんなで考えていってほしいなっというのが希望として一つありますね。
 04 (2.6)
 05 A1: °はい°以上です。
 06 (11.0)((タイピング音))
 07 A1:→ ということでえ::ねっ(.)次回に向けての課題ということで(.)ねっ各自ね(.)あの::
 08 > 今日みたいな<ティーチャートークに気をつけようと思った.とかねこれを
 09 こうやろうと思ったというこう明確なね(.)目標みたいなのは各教師あったと思
 10 うんですけども、今回に出た(.)え:反省というのを生かしつつ(.)次回はあれ
 11 がんばるとか(0.4)そういう気持ちで.え::アクションリサーチ的に臨んでいって

- 12 もらいたいなと思っています。
 13 (1.6)
 14 A1:→ お疲れさまでした::
 15 複: [お疲れさまでした::
 16 複: [ありがとうございました::

ここには前終結相当の発話は観察されないものの、構造化の手がかりが複数用いられている。担当教員 A1 の発話には、05 行目の「°はい°」、「以上です。」といった発話、また沈黙（04 行目、06 行目、13 行目）という、発話の区切れ目を明示する要素が観察される。また 07 から 12 行目の発話内容は「次回に向けての課題ということで（07 行目）」、「臨んでいてもらいたい（11、12 行目）」といったような表現から、今回ではなく次回以降の教壇実習について扱われていることが分かる。また一コマ目から三コマ目という特定の授業、またそれを行った授業担当者へのコメントがこれまでなされていたのに対し、「各自（07 行目）」、「各教師（09 行目）」と、当日授業を行った三人をまとめて扱う表現がなされている。ここでは 07 行目以降の発話が実習反省会のまとめの部分を担当していることが示されている。

三コマ目の授業に対する教員のコメントから最終交換の第一成分までという長い時間、A1 は発話順番を取得し続けている。しかしこの一続きの発話は、その中で異なる局面を担当していることが、A1 の発話中に置かれた構造化の手がかりによって示されているといえる。

6. おわりに

本節ではまとめとして、ここまで行ってきた考察を会話終結との関係から整理する。本研究では、反省会の終結におけるやり取りを、二つの型に分けて見てきた。一つ目は、二段階の手続きを踏む、つまり最終交換の前に言い忘れの導入機会を明示するものであった（抜粋 1, 4.1 節）。これと対比し、終結の際に前終結相当の発話が用いられていない、つまり反省会を終結させることへの同意や非同意を交渉することが行われていない例（抜粋 4）を取り上げた（4.2 節）。抜粋 4 の終結は、終結の直前に発話機会を要する参加者がいることを想定しない形で組み立てられている。

そこで、この時点では終結が行われることが適当であることが、既に何らかの形で保証されている状況が成立していると想定し、この要因を実習反省会の制度に求め、以下二つの特徴を指摘した。一つは、反省会がその会の中で行われることについて構造を持っていることである（5.1 節）。ここには、何がどのような順序で行われるのかの情報が有り、その順序の最後に何が位置付けられているかの情報も当然含まれている。そしてもう一つは反省会でなされた発話中や発話間に、現在の発話の局面を示すことを行う、構造化の手がかりが埋め込まれていることである（5.2 節）。後者から得た現在の発話の位置付けを、前者の構造に照らし合わせ、その中に位置付けることによって、実習反省会が現在進行している、あるいは停滞や逆行していることがリアルタイムに参加者に分かるようになっていていると考えられる（5.3 節）。

反省会の進行に反した発話がなされる例（抜粋 5）から示したように、参加者は基本的に会を前へ前へと進めることに志向している。つまり参加者は、反省会が着々と終結に向かっていくことを、構造化の手がかりの示される要所で確認することができる。抜粋 4 では、教員であり反省会の進行を取り仕切る A1 が、終結に至るまで長く順番を取得しているが、この中でも構造化の手がかりによって局面の変化が示されており、単独の話者の発話内でも反省会が進行していること、終結に向かっていくことが分かるように組み立てられているといえる。

つまり反省会はその場で志向されている制度の存在によって、会を進めることが適切であるという情報が随時やり取りされており、その進行に沿って終結の同意が積み重なるようになっていく。そのため反省会終結の直前においては、既にどこで終結がなされるかを強く予想できるようになっており、「何か言い忘れた人はいませんか」といったいわゆる前終結に相当する手続きは、反省会を終結させる際の手続きとしては必須のものではないことが示唆される。

何らかの会合で、この後何が行われるのかが分からなかったり、今何をやっているのかが分からない時がある。この時私たちは、会合が一体いつ終わるのかと不安になる。これは本研究の考察でいうと、当該の会合の構造や現在の局面が分からず、会合が進んでいることが確認できない状況である。このような経験は、私たちが会合が終了に向かって進むことに常に志向しており、そしてこれが保証されない時、有標な事態として終了を強く意識することを裏付けるものであるといえる。

以上では実習反省会の観察を通して、会話終結に際し、会話全体の構造やそれに対する現在のやり取りの位置の情報が用いられる可能性について指摘してきた。このようなやり方は、制度的場面における会話に特有のものではなく、日常会話でも用いられているものであると考えられる。私たちは普段の何気ないおしゃべりであったとしても、久々に再会した友人との会話の際にはまず近況を、毎日のゴミ出しで会う隣人にはまず気候のことや、もしあるならば昨日近所で起こったニュースのことを話すことなどが緩やかに期待される。さらに会話全体は何分くらい続ける、何分くらいに収めるのが自然であるといったこともある程度思い描くことができる。反省会ほど明確なものではないものの、このような緩やかな期待も含めるならば、日常で行うおしゃべりにおいても会話全体の構造や現在位置の情報が用いられている可能性が指摘できる。このような日常会話にある構造については、実際に生じた会話資料の質的・量的分析の両者を通して今後検討していきたい。

最後に、本研究で扱うことができなかった視覚的やり取りの可能性について述べておきたい。このような多人数でのやり取りを記述するに際し、視覚的情報を扱うことができていないのは本研究の大きな問題であり、今後の課題となる部分である。先行研究では、例えば座る姿勢の変化や、時計に視線をやるなど、身体動作によって示される前終結について指摘がある（Linde 1991）。今回は音声的情報から拾うことのできる明らかな行為、例えば評価シートの受け渡しや席の移動などのみを扱ったが、その他にも視覚的資料にのみ現れる情報が、多くやり取りされていることは間違いない。今後は映像データの分析から、このような資源を含めた記述を進めていく必要がある。

参考文献

- Albert, Stuart & Suzanne Kessler (1978) Ending social encounters. *Journal of Experimental Social Psychology* 14(6): 541-553.
- Atkinson, M. A., E. C. Cuff & John. R. E. Lee (1978) The recommencement of a meeting as a member's accomplishment. In: Jim Schenkein (ed.) *Studies in the organization of conversational interaction*, 133-153. New York: Academic Press.
- 馬場真知子・増田真理子・小熊貞子・広田妙子・木原郁子・越前谷明子 (2000) 「会話の終結部における非言語行動の調査」『日本語教育方法研究会誌』7(2): 40-41.
- Boden, Deirdre (1994) *The business of talk: Organizations in action*. Cambridge: Blackwell.
- Button, Graham (1987) Moving out of closings. In: Graham Button & John R. E. Lee (eds.) *Talk and social organization*, 101-151. Clevedon: Multilingual Matters.
- Clark, Herbert H. & Wade J. French (1981) Telephone goodbyes. *Language in Society* 10: 1-19.
- Drew, Paul & John Heritage (1992) *Talk at work: Interaction in institutional settings*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Heath, Christian (1986) *Body movement and speech in medical interaction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Heritage, John (2005) Conversation analysis and institutional talk. In: Kristine L. Fitch & Robert E. Sanders (eds.) *Handbook of language and social interaction*, 103-147. New York: Routledge.
- Heritage, John & Steven Clayman (2010) *Talk in action: Interactions, identities, and institutions*. Malden: Wiley-Blackwell.
- 平本毅・高梨克也 (2012) 「何か質問はありますか」という問いかけを通じたミーティングの説明場面の構造化」『社会言語科学会第29回大会発表論文集』180-183.
- Linde, Charlotte (1991) What's next?: The social and technological management of meetings. *Pragmatics* 1(3): 297-317.
- 小熊貞子・馬場真知子・広田妙子・越前谷明子 (2004) 「会話の終結部に見られる非言語行動」『多摩留学生センター教育研究論集』4: 33-38.
- 岡本能里子 (1991) 「会話終結の談話分析」『東京国際大学論叢商学部編』44: 117-133.
- 小野寺典子 (1992) 「エスノメソロジーにおける電話会話の研究と日本語データへの応用」『日本語学』11(10): 26-38. 東京：明治書院.
- Robinson, Jeffrey D. (2001) Closing medical encounters: Two physician practices and their implications for the expression of patients' unstated concerns. *Social Science & Medicine* 53: 639-656.
- Robinson, Jeffrey D. & Tanya Stivers (2001) Achieving activity transitions in primary-care consultations: From history taking to physical examination. *Human Communication Research* 27: 253-298.
- Sacks, Harvey, Emanuel A. Schegloff & Gail Jefferson (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50: 696-735. 西阪仰 (訳) (2010) 『会話分析基本論集: 順番交替と修復の組織』東京：世界思想社.
- Schegloff, Emanuel A. & Harvey Sacks (1973) Opening up closings. *Semiotica* 8: 289-327. 北澤裕・西阪仰 (訳) (1997) 「会話はどのように終了されるのか」『日常性の解剖学: 知と会話』, 175-241. 東京：マルジュ社.
- 田中望 (1982) 「別れ」の言語行動様式」『言語生活』363: 38-46. 東京：筑摩書房.

書き起こし記号凡例

- [発話の重なり
: 音の引き伸ばし
h 呼気音
.h 吸気音
.sh すするように息が吸われている
(1.0) 間合いの長さ (秒)
(.) 短い間合い
うん 強く発話されている
°うん° 弱く発話されている

- (うん) () 内聞き取り不確定
- ↑ 直後の音が顕著に高い
- ↓ 直後の音が顕著に低い
- >< 発話速度が相対的に速い
- <> 発話速度が相対的に遅い
- = 間合いなく続けて発話されている
- 直前の語が不完全なまま途切れている
- . 下降調イントネーションで発話されている
- ? 上昇調イントネーションで発話されている
- , 上昇下降調イントネーションで発話されている
- _ 発話が継続しそうな調子で平板に発話されている
- (()) その他注記

A Study of Conversation Closings in Institutional Settings: Analysis of Evaluation Meetings of Teaching Practice

ISEKI Yuriko

Postdoctoral Research Fellow, Spoken Language Division, Research Department, NINJAL

Abstract

In this study, we examined interactions in evaluation meetings to reveal the procedures involved in closing talk-in-interaction in institutional settings. Based on previous research on closing ordinary conversations, we observed the last section of evaluation meetings and identified the characteristic construction used to negotiate whether or not the meeting should be ended.

There were two contrasting types: The first was a method in which the chairperson would ask the other participants explicitly whether they have anything to say or not, whereas the second type of closing meetings presents no opportunity for such negotiation at all. Although we can close meetings using the latter technique, it is reasonable to state that the organization of the closing of an interaction is evident not only just before the closing but also in the earlier part of the session.

We identified the following resources used in organizing the closing of a meeting for the earlier part: (1) cues to structuralizing talk, namely, resources that indicate the phase of the utterance produced, such as “Do you have any other comment?” as well as discourse markers, silence, and expressions about the topic mentioned; and (2) the structure of the meeting, that is, the information about the meeting agenda as expected by the participants. By using these resources, participants can understand the position of the utterances produced in the interaction in real time; as a result, the participants can realize that the meeting would end.

Key words: institutional settings, conversation closings, conversation structure, cues to structuralizing talk